

使徒の働き14章22節 「苦しみの後の神の国」

1A 救われた後の約束

2A 世の愛

3A 反対する勢力

4A 忍従と鍛錬

本文

使徒の働き 14 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、13 章まで来ました。今日の午後に、続きの 14 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、14 章 22 節に注目したいと思います。「弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。」

パウロとバルナバは、ピシディアのアンティオキアから、イコニオン、リステラ、そしてデルベの町へと動いて行きます。そこは、ガラテヤ地方と呼ばれるところで、そうです、ガラテヤ人への手紙の背景となっている地域です。

ローマはこの地域を治めていましたが、大きな都市以外はその統治が具体的なところまで行き届いていたかというところではありません。その地域の実力者が仕切っていた可能性が大きいです。盗賊も多く、治安が行き届いていないこともあったでしょう。それでも、そういったところにもユダヤ人がいて、会堂もありました。パウロとバルナバは、イコニオン、リステラ、デルベに行った時に、困難で険しい地域に入って行ったこととなります。パウロは、コリント第二 11 章において、考言っています。「何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、町での難・・(26 節)」このガラテヤ地方での宣教で、何度も出くわした困難ではなかったかと思います。

14 章では、イコニオンで、信じようとしない人々が扇動して、ついに、指導者たちと一緒に石打ちにしようと企てたとあります。それで難を逃れて、リステラとデルベのほうに動きました。そしてリステラでは、足のきかない人をパウロが癒したのですが、それでその住民はなんとバルナバとパウロを神々に祭り上げようとして、なんとかその動きを制止させました。ところが、はるばるアンティオキア、イコニオンからユダヤ人がやって来て、なんと石打ちにしまったのです。パウロは死んだかに見えました。ところが、彼は立ち上がりました。そして再び、リステラの町に入り、それからデルベに行きました。今度は、これら自分たちの命を狙っている者たちがいるにも関わらず、元来た道に戻って、そこで信仰に入った兄弟たちを励まして、長老たちも立てて教会を建てて行ったのです。その中で、弟子たちの心を強めるために行った言葉が、22 節でした。「神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」です。使徒たちが通った苦しみを、彼らも同じ信仰に入

っているので通らなければいけないこと察して、彼らが主に留まっているように励ましたのです。

1A 救われた後の約束

人の救いというのは、個々人に起こりますが、同時にそれは壮大な神のご計画全体の中で起っていることを知ることは大事です。アダムが罪を犯したことによって、サタンに世界への支配が移されました。罪ある者として生まれ、罪の中に生き、悪魔の支配の中に生きなければいけない存在でした。「エペソ 2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

けれども、信仰によって罪が赦され、神の子どもとされた後には、サタンの支配する国から贖い出されて、神の支配の下に置かれ、神の国を相続するようにされたのです。パウロが、イエス様からこう語られていました。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。」コロサイ書で、パウロはこう言っています。「コロ 1:12-13 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることができますように。御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」ペテロは、新しく生まれた者たちが、神の国を相続するにあたって、今、天にその資産が蓄えられていることを話しています。「I ペテ 1:4 また、朽ちることも、汚れることも、消えていくこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。」

考えてみてください、これはすごいことなのです。神はどれだけのものをお持ちですか？この世界とそこにあるもの全てです！それをキリストによって救われたということだけで、ご自分の国にあるものを受け継がせると言われます。神の息子になるということは、そういった無尽蔵の所産を受け継ぐことに他ならなく、最も優れた国の王子となったことでもあります。パウロは、キリストが再臨される時に起こることについて、エペソ書でこう話しています。「1:10-11 時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあつて、一つに集められることです。またキリストにあつて、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。」天にあるもの、地にあるものがキリストにあつて集められて、その神の国を私たちが受け継ぐことになるというのです。

以前も話したことがあります、明治に生きた伝道者、木村清松は、アメリカの壮大なナイアガラの滝のところに連れて行かれて、「こんな大きな滝は日本にはないだろう」と言われた時に、「このナイアガラの滝は俺のおっとさんが造ったのだ。」と語ったのだそうです！それを聞いたアメリカ

の教会の関係者が感銘を受けて、新聞広告に、「ナイアガラの時の所有者の息子来る」という広告を載せ、教会には溢れるほどの人々が押し寄せたのです。あの壮大なナイアガラの滝を、「これ、僕のお父さんのだよ」と言わしめる、それほどの豊かさを私たちキリストにある者は持っています。事実、神の国において、そういった莫大な財産を私たちは受け継ぐことになります！

2A 世の愛

パウロは、このような輝かしい栄光の希望を見据えて、大いに喜んでることを述べています。「ローマ 5:2 このキリストによって私たちは、信仰によって、今、立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」爆発的な喜びを、パウロは言い表しています。ところが興味深いことに、彼は次にそのままこう言っているのです。「5:3a それだけでなく、苦難さえも喜んでいます。」神の栄光を見て喜んでいられるれども、この世においては苦しみがあるということが直結しているのです。将来の栄光に入るまでには、今の苦しみがあるということです。

私たちキリスト者は、この落差に戸惑うことがありますね。リトリートやカンファレンス、つまり修養会や聖会など、日常の生活から離れて、御言葉と賛美、祈り、そして交わりの中で過ごしてから、日常生活に戻る時に、以前にも増して、試練や攻撃が待っている場合が多いです。高い山に三人の弟子が連れて行かれて、栄光の御姿に変貌したイエス様を見て、それから麓に戻ってきたら、そこで悪霊につかれてもたえ苦しんでいる少年の姿がありました。そのような落差を経験します。

私たちは、福音を聞いてキリスト者になると言えば、これまで抱えていた問題が解決されて、バラ色の生活が待っているのでは？という甘い期待をかけてしまうのですが、これはある意味で当たっています。将来、私たちの主が戻って来られて、罪と不法を裁かれて、正義と平和の満ちる神の国を自ら王となられることによって打ち立てられるのですから、そこにはバラ色の世界が待っています。けれども、今の世界では期待できないどころか、一見、正反対に見えるような苦しみを経ることがあるのです。「キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」とパウロは言いました(Ⅱテモテ 3:12)。

それはどうしてでしょうか？神は、悪魔が支配している世を滅ぼして、新しいご自分の国を立てる前に、その中にいる人々をキリストによって贖い出されるからです。「ガラテヤ 1:4 キリストは今の悪い時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。」それはあたかも、イスラエルの民をエジプトから脱出させて、それからファラオと彼の率いる軍隊を紅海の中で滅ぼすのと似ています。罪の奴隷の中にいる私たちを救い、聖霊の証印を押して、そして贖いの日に、悪魔の勢力を滅ぼして新しい御国に入れてくださいます。ですから、そのことが起こる前は、ファラオがちょうど、神の民を出て行かせないとしたように、何とかして世の神であるサタンが、私たちの信仰に歯止めをかけようとするのです。

3A 反対する勢力

世は神に敵対しています。ですから、世を愛せば神の敵になり、神を愛せば、世から憎まれます。「Iヨハ 2:15-16 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」「ヤコブ 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友となりたいたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」世を愛したり、世の友になると、神に敵対してしまうことになります。そして、世が憎むことについてイエス様が言われました。「ヨハ 15:18-19 世があなたがたを憎むなら、あなたがたよりも先にわたしを憎んだことを覚えておきなさい。もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」

ですから、どちらかでしかないのです。日本の文化に気遣いというものがあります。最近は、「忖度」という言葉がありますね。相手がどう思っているのかを、直接、相手から言われたわけではないのに思いやって、先んじてその願望に合ったことを行うのです。ですから、日本の文化の中ではあからさまな反対の声を聞きません。自ら、反対されないように先んじて動いてしまっているからです。けれども、これが霊的に致命的であることは分かるでしょうか？イエス様を主として、この方を何にもまして愛していかなければならないのに、忖度して、イエス様を二の次にしてしまうのです。

イエス様は、この問題について真っ直ぐに解答しておられる言葉を語られました。長くなりますが、マタイ 10 章 34 節から 39 節までを読みます。「34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。35 わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。36 そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。」これは、家族に敵対しなさいと言う教えではありません。イエス様を愛して生きていくなら、未信者と家族との確執は避けられないということです。「37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」これは、優先順位の問題です。家族はとても大切です。けれども、イエス様よりも大事にしたらイエス様の弟子ではないのです。「38 自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。39 自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。」イエス様を主として生きることは、自分に死ぬことです。そして、自分に死なず、生かそう、救おうとするならば、結局、その生かそうとするものを失ってしまいます。しかし、福音のゆえに失う覚悟でいるならば、その失ったものを取り戻すことができます。

気遣いについて言うならば、日本の文化では、いろんなことに気遣うことは美德とされています。

それ自体はすばらしいことです。けれども、イエス様との関係の中では問題が生じることがあります。マルタとマリアがイエス様を家に迎え入れた時のことを思い出してください。主がマルタに言われました、「ルカ 10:41 マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」大事なことは世にはたくさんあります。しかし、その大事なことの中で、何が最も必要なことなのか、その一つを選ぶ勇気があるのか？ということです。いろいろなことで思い煩って、イエス様に聞くという最も大事なことを疎かにする。これは、世を愛していることとなります。自分自身を求めている、イエス様を求めています。

4A 忍従と鍛錬

では本気で、イエス様を主にして仕えていくなれば、どうなるでしょうか？困難が出てきます。世の流れとは真逆のことをしなければいけないことに気づきます。例えば、牧師や宣教師が、どうやって生活しているのか？と不思議になる日本の方々が多いです。儲けにならない仕事をしていて、では、どこで生活の糧を得ているのか不思議になるのです。そうです、生活の保障となる基本のところをまるで無視して動いているかのように見えます。けれども、どこかで不思議にも、それぞれが、必要が満たされているからこそ、その働きができています。神がおられるので、神が備えておられるという信頼が必要です。けれども、福音の働きの専従者でなくとも、キリスト者として生きるのは、世の流れに抗うことです。普通に、いわゆる常識的に生きようとするならば、クリスチャンになること、クリスチャンとして生きることは理にかなっていません。やめていくことでしょう。事実、信仰から離れてしまう人々は多く現れます。

私たちには輝かしい、神の国の約束が確かに与えられていると同時に、その約束を手にするまでの道のりは陰しいのだということを知る必要があります。漫然と生きているのであれば、その先は必ず滅びであることを知る必要があります。「マタ 7:13-14 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。」主体的に、能動的に主という狭い門の中に努力して入ることを行って、初めてそれがいのちへの道なのです。

パウロとバルナバが、イコニオンで主のことばを語った時に、大勢の人が信じましたが、一部の人々が他の人たちを扇動して、彼らに悪意を抱かせていました。けれども、それで二人はむしろ、「14:3 主によって大胆に語り、主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。」反対があった時に、むしろしっかりと主に堅く立ち、主に言われていることをますます大胆に行っていたのです。脅しに屈することなく、むしろもっと大胆になったのです。

約束を得るために、しっかりと主にある自分を堅く保ち、今を耐え忍ぶということが必要です。最後まで耐え忍んだ後に救いがあることを、イエス様は次のように教えています。「マタ 24:9-13 そ

のとき、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」信仰によって歩む道の中で、自分がつまずきそうになるような出来事は、ここでイエス様が言われているように、いろいろあります。まず、だれか悪意を抱く人々が表れます。また、多くの人々が憎み合っています。偽預言者が教会の中にも出てきます。不法があるので、人々が互いに信用なくなり、自然の愛が冷えてしまっています。そのような、つまずきが多い世にあって、なおのこと主を信頼し、最後まで耐え忍ぶのであれば、その後には、神が約束してくださった御国に入ることができるのです。

それは、我慢することとは違います。苦しみをひたすら無意味に耐えているわけではありません。信仰による忍耐でなければ、世が悪くなればそれだけ苦々しくなることでしょう。けれども、信仰を働かせて忍耐するところには、神が私たちの内を練り清めてくださって、品性を生み出してくださるのです。先ほど読んだローマ 5 章の続きを読みます。「5:3-5 それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」私たちは、苦しみによって苦々しくなるどころか、希望に至り、そして神の愛が聖霊によって注がれるようになるというのです。神の愛を知った私たちですが、苦しみによって、キリストの愛がいかにくぐれたものなのか、それを深く知ることになります。愛によって成熟した人間になるのです。苦しみによって、キリストを知るようになるのです。

ですから、神の国に入るために多くの苦しみを経なければいけないという言葉は、決して消極的でないことを知ってください。それは、御国の中に豊かに入る恵みなのだということなのです。もちろん、何も経験せずに、神の国に入ることが許されています。けれども、世において反対を受けても、なおのこと信仰を働かせる時に、その後に来る御国では、その豊かさにますますあずかれるようになるのです。ペテロが言いました、「Ⅱペテ 1:11 このようにして、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを、豊かに与えられるのです。」